

時間外にやればいいのではないかと思う。

大西 そうです。たしかにプラスアルファがあるわけであり、成果として何らかの形で自分に戻ってくるはずです。

(3) ポリテクセンターを中心とした現状

城 ポリテクセンターのほうでは、どう見ていらっしゃるのでしょうか。

青柳 ポリテクセンター君津では、報文誌とういうものが存在していることを、全職員が認識はしています。しかし、個々人の受け止め方は十人十色です。内容を読む方もいますし、関心を示さない指導員もいます。

率直な意見としては、報文誌に興味のある方は大いにやっていただければいいのでは、というところです。

ポリテクセンターの指導員の目から見れば、やや高度だという印象が強いし、どちらかと言うと、工学オリエンティドな内容が報文誌の目的だろうと思われていて、当初の発刊目的がポリテクセンター側の人間に十分認識されていない面があるようです。

城 ポリテクセンターとの関係では、事業団本部では教材作成を援助しています。ですから、指定研究と同じように、教材作成援助を受けたものは、なるべくこれに載せるというはどうでしょうか。

印南 教材作成に関するようなテーマを報文誌に投稿してもいいという認識が十分浸透していないのが実状のような気がします。

小林 そのへんは徹底していなかった部分もあったと思います。



大西 ポリテクカレッジの場合は、新しい教材を開発して、それを、今までの訓練はこういうところが具合が悪かったので、こここのところへこういう教材を開発すればいい。そ

の結果これだけの教育効果があるかというところまで考えて、教材開発ができればよいのですが。

ポリテクセンターの場合には教材作成は十分可能であるが、それを“論文”にまで展開するところまで行かない。こここのところが問題なんだろうと思います。

室田 論文を出すときには必ず批判を受けなければならぬわけで、そういうことに大変心情的に抵抗があって、なかなか一般的なものにならない。教材研究等も、教材作成費の援助を受けたところは蓄積がある。それが他のセンターに情報として流れてきて、それを

使えということがあったかというと、ほとんどないといつていい。

小林 ポリテクセンターで作成された教材は各施設の中に温存されているわけで、そこでは意味があるものです。しかし、効果のあるものであれば事業団全体に普及することが望ましい。私は、この報文誌がそういう意味で一つの役割を果たすと思う。

誰が真似してもいいし、利用してもいい。こういうものを訓練に使うのはいっこうに構わないという、そういういた雰囲気が必要ではないでしょうか。

城 次に、研修との関係ですが。研修を受講した人が研修の成果をなんらかの形でまとめる。研修は、この研修研究センターの研修だけではなく、いろんな研修があるわけですが、こここの研修でいえば専門第二期のように、かなり長期間で非常に専門性の高い研修もある。研修の講師によっては、研修の成果を最後に論文的にまとめる指導をしているものもあると思います。それを投稿することも大切ではないでしょうか。

小林 そのとおりです。

印南 実習実験についても、終わったらその結果がなくなってしまうということにならないよう、日常成果、日常訓練の成果をまとめるところに意義があると思うのです。今後、この辺を論文としてまとめ、投稿促進することが必要ではないでしょうか。

城 研究活動と報文誌との関係についてのいろいろなご意見を要約しますと、一つは現場で先生方がやっておられることについてのノウハウは相当ある。しかし、それが広く共有のものとなり事業団全体の共通の資源にならなければ、能力開発が向上することにならないのではないか。つまり、能力開発のノウハウを公表することが非常に大事であるのではないか。

それから度々出ていますが、工学的な見地ばかりではなくて、能力開発、教育全般の投稿を一層促進させていく必要を痛感します。

ポリテクカレッジとポリテクセンターでは、やはりポリテクセンターにはハンディがあるようです。しかし、これからはポリテクセンターからの投稿が増えるような環境整備をしていく必要があると思います。

さて、報文誌は10号を重ねるわけですが、当初考えていたものと違うにしても、これまで果たしてきた役割についてはいかがでしょうか。

大西 現在、特にポリテクカレッジを中心にしてこの報文誌の果たしている役割はかなりあると思います。やはり報文誌があるので、皆さんができる研究をする雰囲気が確実に育まれたと思うのです。

城 報文誌の当初考えられた内容とは変化してはいますが、指導員の方々の資質の向上という点で、それの方がやっておられる研究の成果を公表し合う場が設けられたということで、それなりの意義はあったのではないかということだと思います。

他の学会、あるいは研究との関係についてはそれぞれ役割が違うと思われますが、この報文誌に掲載されるものはかなり高いレベルのものとして位置づけられていると思います。

しかし報文誌のこれまでの掲載内容を見ると、分野が非常に多岐に亘っていることもあります。読み手が全体を通して見るということはなかなかむずかしいのだと思います。

ポリテクセンターにおいては、その存在は知られていても、投稿するところまではなかなかいかない現状がある。内容の専門性が高いこともあります。職場もなかなかそういうゆとりがない、ということですね。

4 カテゴリと校閲査読について

城 カテゴリーの問題、校閲の問題ということで、図2に投稿募集から発行までの流れがありますが、実際はかなりの時間がかかっています。募集発表をする時期から発行するまで10ヶ月、約1年近い期間です。

大西 投稿者にとっては、投稿した時点から見ると随分遅い感じるでしょうね。

論文というものはどの世界でもそうですが、新規性という点では人がやっていないことを出すわけです。そういう意味では、できるだけ早く発行してほしいと思います。

城 報文誌には発行方針により、「報文」と「研究ノート」と「実践報告・資料」という3つのカテゴリーがあります。そして、校閲査読をするポイントとして、職業能力開発に関する有用性、発展性、新規性、完結性、信頼性というものがあり、特に「報文」については、これらの要件を満たさなければならないということになっています。

室田 この分類は、私は現実的にいいのではないかという気がします。今は工学オリエンテッドになっていますが、絶対評価をした場合にそのレベルがどうかということは不間に付しています。

たとえば、機械学会全体でどのくらいの価値があるかということには全然触れないという状況です。そういう意味では、能力開発の論文がもっと多くあっても本当はいいと思う。

大西 それならば、査読の先生方がそういう意識を持って査読する必要があります。校閲査読委員は、おそらく一般の学会と同じようなつもりでされているのではないかでしょうか。これまでの掲載論文を読むかぎりでは、能力開発の見地からこれを査読指導しているように見えないです。

室田 そもそも原型となったものに機械学会の雑誌があった。当時、それが頭にあったわけです。体裁や何かも、そういう形で出てきているのだと思います。

小林 職業能力開発に関する有用性とか新規性と言えば、現在の状況では、投稿した段階で、有用性や新規性はありますことになります。

ところが、職業能力開発分野におけるノウハウは投稿が少ないために、まだ全然埋もれたままになっています。

大西 教育訓練の立場からの校閲査読は専門の方にやっていただかないと、なかなかできないのではないかでしょうか。

小林 教育訓練に直結した研究を行っている人は少ないことから、校閲査読ができる人もそう多くはないと思われます。

城 現状では能開大の指導学科の先生や研修研究センターの研究員あるいは編集委員という方々にお願いをすることになると思います。

室田 能開大の先生方には、校閲査読に関しては大変なご苦労があったわけで、心から感謝しています。

大西 論文を書くより大変な場合があります。

城 編集委員会の方針としては、投稿数が少ないとあり、校閲査読に際して、新規性に関して言えば、これまで実践教育研究会発行のジャーナルとか、技能と技術誌とか学内紀要に掲載したものでも、校閲査読を受けていないという観点から、加筆訂正して再投稿しても構わないことになっています。



青柳 新規性ということについてなのですが、必要な項目だと思うのですが、ポリテクセンター側からみて、既存の技術の見直しなども報文誌に載るとありがたいということがあります。どういうことかいうと、ポリテクセンター君津では、マイクロコンピュータやパソコンを一生懸命やっている方がたくさんいるのですが、受講者としてはマイクロコンピュータやパソコンによる制御よりもシーケンサと呼ばれている現場に即したコントローラを使う方がたくさんい

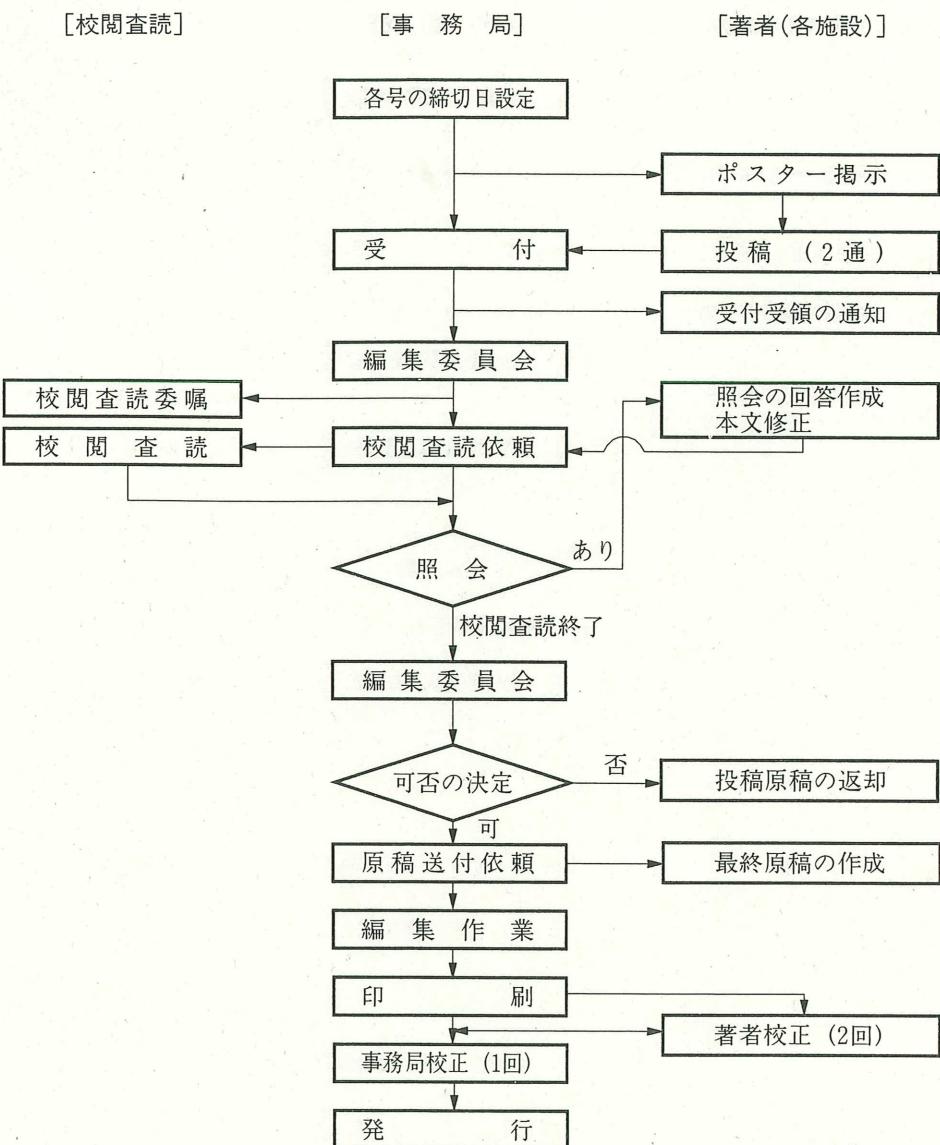


図2 受付から発行までの流れ図

らっしゃるのです。マイクロコンピュータはほとんど講習会としても成り立たない。プログラマブルコントローラによる制御は出来上がっている技術だと思いますが、そういうことの指導をどうしたらいいのかがモヤモヤとして方向が出ていないのです。

たしかに、新しいことも非常に重要なことだと思いますが、現場でたくさん使われている既存の技術についても、効果的な指導方法や、新しくこういうことが付け加わったというようなことも必要です。

大西 それが新規性なのではないですか。

小林 十分新規性があると思います。それでいいのではないかですか。

大西 何も技術が新しいということではなくて、その

技術を使って何か新しい仕事をするとか、あるいは新しいことにアプライする、ということでもいいのではないかですか。

城 新規性といった場合、その分野でどういうことがすでに出されているのかということをレビューするのが研究をしていないと大変なのでしょうね。

大西 校閲査読をする上では、職業能力開発に関する新規性については柔軟に考えていくことも現時点では必要でしょう。

室田 ポリテクセンターでの在職者の訓練なら訓練で、既成のものを利用し、考えながら効果のある授業をやるということがあるわけです。そして、新しい少し違った教材とか、少し違った教え方によって、非常

に能率よく受講者が理解することが教育訓練上の新規性だと思っていいと思います。

新技术を研究するというのは、私たちの立場からすると、目的が違うと思うのです。我々の仕事では技術は公知の技術です。それに、教育的アプライをする時に受講者が非常にいい仕事上の適応ができるような教育をしたという評価が新規性だろうと思うのです。

それで、君津でのこういう技法がよかったということになり発表されれば、各ポリテクセンターがなって全体のレベルが上がっていくという役割が、報文誌にあっていいのではないかという気がします。

小林 技術の新規性ではないのです。まさにそこが狙いなのです。

大西 発展性、新規性、完結性という観点から、ある程度校閲査読をしてみても、結論はむずかしいですね。

城 辻前青森短大校長から以前に「技能と技術」誌に論文の書き方について投稿をいただきましたが、あれはどちらかというと一般学会誌での投稿向きで、書き方に関してのハウツウのようです。

ところで、校閲査読委員と投稿者の関係は、通巻10号までは、特別に「本人と直接話したいのですが連絡お願いします」ということで投稿者と連絡したい場合以外は、事務局をとおしてやりとりを行いますからお互いの氏名は伏せてありました。

大西 投稿者と校閲査読委員はディスカッションするのではないということです。文章は上手ではなくても意味さえ通れば、無理に直させない。あまり無理をして直すと、もう書く気がしなくなってしまうものです。

ですから、査読する人は総合的に判断できる人が「よろしい」ということになる。読んでみて文章的にも文法的にもおかしくない場合には、多少のことがあってもその人の個性だからくらいのつもりでないと、うまくいかないのでしょうか。

城 校閲査読する方も大変、受ける方も慣れていないのでおもしろくないということがこれまでにあるのですが、校閲査読体制が報文誌の特徴であり、ある程度のレベルを保ってきていることも理解をしていただきたい。

校閲査読体制は報文誌のレベルを維持する上で重要なものですが、現実には編集委員会からお願いしている校閲査読委員が大変な苦労をされております。投稿者にも校閲査読について十分理解をしていた



だく。「そんな厳しいことを言わないで」というようなことがないようにしていただきたい。

ただ、職業能力開発分野の論文を増やしていくということになると、それに対する校閲査読体制を考えていく必要があると思われます。

5 投稿促進のためのポイント

(1) 職業能力開発分野の投稿促進を図るポイント

城 今後、投稿対象者は、雇用促進センターも含め全事業団職員になりますが、やはり、対象を広げた以上いろいろな範囲から出ることが望ましい。その辺のところはいかがでしょうか。

室田 論文としては、教育的なものは書きにくいと思います。ただ私は、教育的なことあまり狭く考えないほうがいいと思います。このような研究はだんだん深まっていくわけですから。

たとえば、能力開発セミナーでの新規コースの開発に対する考察は、非常に深い内容があると思います。訓練ニーズも、掘り下げれば掘り下げるほど奥深い問題なのです。そのようなものを実際には、各ポリテクセンターがやっているわけで、それをきちんとトレースして、まず論文の形式にまとめてみる。そして誰かに見てもらったり、深めたりという方法もあるでしょう。

また、在職者を訓練するためにはどういう施設が理想的なのか。ただ教室があって教材があるということではなく、ある程度、休憩するような、気分を転換するような仕掛けもなくてはならないとか。そのようなことをきちんと実証的にやる。そういうことが、職業能力開発で日本には今までなかった。

われわれが日常経験をしていることを、論文として構成できるようにもつくる努力をすれば、雇用促進センターでもポリテクセンターでも、十分投稿する余地が出てくると思います。

ポリテクセンターには、高齢者のマスターコースがあります。たとえば3ヶ月お預りする場合、そういう